
年上のそんな人

柊葉一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

年上のそんなん人

【NZコード】

N5671E

【作者名】

柊葉一

【あらすじ】

進展しようと頑張った男のある一夜の話。「那人」が男をどう思っているか、読者にははじめからわかつていたことでしそう。

元気で無邪気、おおらかでさばけていて、しっかりとした芯を持つ
ている、年上のそんな人。

その人と、映画を観て、夕食を食べて、バーに行つた。
日付が変わるまで飲んで、帰ることになつたが、もう少し一緒に居
たくて、飲み足りないと言つてみた。

するとその人は

「家に梅酒とワインならあるけど、どうする?」
とこちらに視線を寄せた。

強がって、飲み足りないと言つた心臓が、大きく高鳴つた。

その人のアパートまで行くと、その人はもう一度
「どうする? 飲む?」と聞いてきた。

こんなチャンスは二度とないかもしれない。そう思いながらも、こ
こで飲んだ勢いで気持ちを伝えれば、きっと信用してもらえないだ
ろうという懸念もあつた。実際、普段よりも多めに飲んでいたので、
足もとがふわふわしていた。

「任せます」

後悔すると分かつていても、完全に逃げ腰になつていた。

その人は一度考えるように夜空を見上げると、こちらに視線を戻し
た。

「そのふらふらで帰られるのも、怖いなあ……いいや、とりあえず
寄つていきなよ」

そうして手招きをした。

誘われて、これ幸いと従つことにした。

その人の部屋は、きちんとしているわけでもなく、散らかっている

わけでもなかつた。

ワンルームのため、座つたすぐそばにベットがあつた。

ふわふわしていたので、すぐにベットにもたれてしまつた。

「お茶の方がいいでしょ」

とその人が言つた。とりあえず、頷いておいた。バコン、と冷蔵庫の開く音がした。

「こちらは気にせず、先輩は飲まれたらいいですよ」

氣を遣つたつもりで言つと、その人は

「冗談、私も結構酔つてるもん」と答えた。

ベットを背にして一人で座つていた。

遅れて回つてきた酒と雰囲気に酔つて、話すことも辛く感じた。その人も、普段は饒舌なのに何も話さなかつた。しばらく沈黙が続いて、急に、本当に上がり込んで良かつたのかと、不安に駆られた。しかし、いまさら後に退くこともできないと分かつっていた。

「何か、……話して下さい」

無理やりに話題を持ちあげようと、言つてみた。

「ええ、何をよ？」その人がこちらを向く。

「いつもみたいに、ほんぽん何かでてこないんですか、話題」

「そんな、普段から話題振つてるつけ？……福田内閣についてとか、語つてみる？」

「語れるんですか？」

「や、ゴメン。言つてみただけ」

「ちょっと、もたれさせてもらつてもいいですか？」

自然と、言葉が口をついて出た。

しかし、このくらいのことでは、その人は感情をみせてくれない。

「ああ、しんどい？いいよ、寄りかかりなよ」

おいでおいで、とその人が手招きをするので、簡単に寄りかかることができた。

バーで酔つて居た時も、その人の肩にもたれさせてもらつていた。

その時も思つていたことだつたが、なぜだかとても、その人に触れることが心地よかつた。緊張なんて吹つ飛ぶくらいにだ。それを素直に、伝えてみることにした。

「なんか、すごいですね先輩つて。傍にいるとすつじく癒されるんですけど」

もう半分、告白したようなものだと思つた。のに、それでもその人は揺るがなかつた。

「え、そう? なんだり、マイナスイオン出てるのかな」

真顔でそう返してくるので思わず笑つた。ついでにその人の腕に、手を絡ませて反応を見ようとしても、その人の表情からは何も読み取れなかつた。

途中から、緊張感や不安は、全く感じられなくなつた。代わりに、その人の気持ちがどうやってでも知りたくなつた。自分にこれだけ優しくしてくれるということは、それだけ、期待してもいいのかと、その思いに対して期待した。

しかし、時間は迫つてくる。朝日が昇る前に家に帰らないと、講義もあるし、その人にも迷惑がかかると思つた。

「なんか……」その人がとろんとした目で口を開いた。時間が時間がだつたので、かなり眠たそうな顔をしていた。

「なんですか?」顔を覗き込んで聞いた。

「どうでもよくなつてきたなあ……」

「え?」

その人は急に立ち上がると、そのままベットに倒れこんだ。

困惑しながら、その人の半分枕に埋もれた顔を見ると、その人はこちらを見て、にこおつと笑つた。

その表情に突き動かされて、こちらもベットに腰をかける。

そしておそるおそる、その人の隣に、体を横たわらせた。その人はただ、こちらを見ていた。

「ああ、やつと腰が……」体を伸ばしながら言つた。横を見るのは恥ずかしかつた。

「ふふ、君はさあ、結構寂しがり屋だつたりするでしょ？」

唐突な質問だつた。けれど、素直に答えることにした。

「ああ、そうですね実は。あんまり人に言えないんですけど」

「甘えるのも下手そうだね」

「うん、そうです、たぶん」答えながら、横田で少しだけその人の顔を見た。

上目遣いでじつと見られていた。それが分かつて、恥ずかしくなつた。今、その人を直視すれば、理性が吹き飛ぶと思った。

「今日は楽しかつたから……そんな寂しがりの君にオプションサービスをあげよう」

そう言つて、不意にその人は上体を起こすと、こちらの腕をまっすぐ伸ばさせて、そして、その腕の上にまた寝ころび、体の前に腕を縮めて、こちらの胸元に顔を寄せて來た。

平常心なんか消える。心臓の鼓動が、一気に跳ねあがつた。

こちらの動搖とは反対に、その人はそのままの状態で落ち着き払つていた。

沈黙のなか時折、体の位置を正すようにしながらも、こちらに身を寄せてくる。

その人を今まで以上に愛しく思つた。

高鳴る鼓動を感じながら、その人へ要求する。

「もつと、……近づいていいですか？」

その人は、ふふ、と笑つたかと思うと、「いいですよ」と答えた。空いている方の腕で、その人の体を、おそるおそる抱き寄せる。柔らかい感触に、目がくらみそうだった。

顔も口も、呼吸も、心臓の鼓動も、すべてが近すぎた。

キスしようと思えば、いつでもできる距離。

もう、考えることも馬鹿らしくなって、その人に思わず聞いた。

「……こうじうことを許してくれるってことは、……そういう風に思つてくれてるって取つてもいいんですか？」

一番、鼓動が高鳴つているところを分かつていた。

その人は、腕の中で肩を竦めると、ゆっくりといちからの中腰を回してきた。

「それを私に確かめるつてことは、君はそういうことか？」

顔を見せずに、俯いたままその人が聞き返してきた。

「そうです」はつきりと答える。

するとその人は少しだけ体を離し、こちらに向かって直るようにして、まっすぐに視線を合わせてきた。

「……私は、手がかかるよ。いいの？」

試すような視線が注がれていた。その視線に抗つことは不可能だった。

「いいです、全然」「考える必要などなかつた。

「じゃあ、そういうことだよ」

そういつてその人は、回してきた腕に力を込めた。それに応えて、こちらもその人を力いっぱい抱きしめた。

その瞬間、今まで感じたことのない幸福感に包まれる。その時。

「あーああ……ようやく言つてくれた」クスクスと笑いながら、その人が言った。

「……え？」

「早く言えばいいのに、なかなか言わないから、こんなことまでしちゃつた。まあ、結果的に落とせたからいいけど、いたずらっぽい目がこちらを向いていた。

「わざと、仕向けたんですか？」

あんぐりと空いた口が閉じられそうになかった。

「うん、そう。」にこおど、悪びれる様子もなく、素敵に笑う。

呆れながら、悔しくも思いながら、この人には絶対敵わない、改めてそう思はされた。

年上の、僕のそんな人。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5671e/>

年上のそんな人

2010年11月20日15時19分発行